

谷崎潤一郎『細雪』の雪子にみる時代への拒絶

熊 尾 紗 耶

はじめに

『細雪』における雪子の物語は、没落階級にありながら「花やかなりし昔」（下巻八章）のままの生活を守り続け、貴族出の御牧と結ばれる幸運を得るといふ、絵巻物のような美の表象として紡ぎ出されている。妙子の身に降りかかる、水害や恋人の死、赤痢などの受難の数々や、自らの手で運命を切り開こうとする、その果敢なあり方に比べると、上臈にもなぞらえられる雪子の暮らしは、いかにも穏やかで平淡なものに思われる。しかし、世俗からは隔絶された世界に生きる上臈とは異なり、雪子は慌しい世相の中で、安住の場所さえ与えられていない。雪子は、蒔岡家の領域だけに生き続けることを許されず、同時代の多くの女性と同様に、結婚と出産による「家」や「国家」への貢献を求められる立場にあった。蒔岡家もまた、社会の動きとは無縁でなく、時代の進行とともに旧来の生活様式は

失われつつある。雪子の上臈のようにも見える暮らしぶりは、脆く危うい立場の上に築かれたものであった。

さて、これまでの雪子をめぐる考察をみると、伊藤整の「解説」^①を基盤として、多くの言及がなされており、そこにはほぼ定説といえる人物像が確立しつつある。伊藤は、読者の感動を構成する要素として「雪子の与へる特殊な効果」を挙げており、雪子を「一種の永遠の美しさを保つてゐる」、「『竹取物語』のかぐや姫にも通う存在であるという。雪子の与えるこうした形象に對して、中村真一郎は「殆ど観音像を刻む仏師のような、憧憬をこめて」描かれた、「古い絵巻物のなかの貴女のような女性」と評しており^②、藤田修一は「谷崎の観念の内なる日本的な美の一つのタイプを示した傀儡に過ぎない」、「陰翳」の美を描き出すために造型された人形と説く^③。東郷克美もまた、雪子に非人間的な特質を認めており、「ほとんど人形に近い存在として描かれていて、もっとも肉体性が稀薄」であ

るとしている。⁽⁴⁾ 三田村雅子も同様に、雪子の人形的な特徴について言及しているが、東郷とは異なり、「人形」のような剥き出しの無防備さ、弱々しさ⁽⁵⁾が、かえって男性の無意識の欲望を引きつける、あやうさを持つものであると指摘する。⁽⁶⁾ さらに、丸川哲史は雪子を「近代的な自己意識と無縁な伝統的な非行動的な女性」、「内気な「売れ残り」の女性」であり、幸子や貞之助は「彼女を売るべき「商品」として眺める」「売り手」の立場にあるという。⁽⁶⁾ これらの論考は、いずれも雪子の神秘性や人形的な性質を捉えたもので、没個性的な女性像の類型として、その人物像が提示されている。

伊藤整を基盤とする、雪子の外面上の特徴に意義を見出す読解の傾向に対し、それより以前に書かれ、雪子の内面について、いち早く言及したものととして、折口信夫の『細雪』の女⁽⁷⁾が挙げられる。大阪風の家庭に持つて来られた為、うっかりすると平凡な風に見られさうなのが、雪子である。新古典主義風の効果を持つて書かれてゐる此女性⁽⁸⁾は、若し「細雪」の、仏蘭西あたりの国語に翻訳せられた時を思ふと、此こそなか／＼彫り深いみじき性格を発揮するだらうと思ふ。名の表す雪——それも、春の柳に降りかゝるもの、やうに、清く弾力があり、深きを装はずして自ら読む者には、味ひの益深きを感じしめる、個性のないやうで、三人姉妹の中、最根強い性格である。淡泊かと思へば、意外に執拗であり、精神的かと思ふと、思ひがけなく肉体的な

ところがある。

次に、同じく雪子の内面に触れたものとして、菊池弘の論を見てみたい。⁽⁸⁾

雪子は殆ど自己を主張しない、どこことなく稚純さを堪えていることで清楚な感じを与える。世俗の汚れにまみれることなく生きていくが、芯に固い自己を持っており、周囲の人間が反って心を使わされる「へしぶとい」存在性を示している。

弱々しくあえかな印象を抱かせる雪子であるが、折口は雪子に「根強い性格」や「執拗」さを認めており、菊池は「芯に固い自己」を持つ「へしぶとい」存在性⁽⁹⁾を指摘する。

このような氣質が雪子に備わっていると考えた時、果たして雪子を個性も判断もない、人形的・類型的な女性と言いつけるだろうか。雪子の外面上の特徴が、物語を支える機能として取り上げられ、様々な考察が試みられる一方で、その内面の問題については殆ど踏み込まれておらず、まだ十分な検討がなされていないように思われる。また、雪子が進行する時代の只中に置かれながら、自らを取り巻く「家」や「国家」に対し、どのように向き合っていたのか、これまであまり顧みられてはこなかった。本論では、雪子と「家」や「国家」との関係をもとに、当時の女性規範や同時代の女性像との比較を行い、その個性を示すことで、人形的・類型的とみなされてきた雪子像の読み換えをはかりたい。その上で、戦争へと向かっていく

時代の中で、雪子がいかに生きようとしていたのかを考察する。

一、時代の中の雪子

『細雪』は、昭和十一年（一九三六）から昭和十六年（一九四一）にかけての出来事を描いた作品である。本節では、戦前の社会において、雪子の生き方がどのような意味を持つものか、当時の女性規範と照らし合わせて考えてみたい。

明治二十年代末から昭和十年代にかけて、女子教育の目標として掲げられ、理想的な女性のあり方とされたのが良妻賢母像である。時代の推移にともない、その内容も変化し、家族国家観のイデオロギーの確立によって、天皇制国家を支える規範として強化されていった。牟田和恵によると、それは単に儒教的・封建的女性像そのままへの回帰ではなく、さらに「男児を育てる母」としての修養が求められた。⁹⁾ 封建期の女性が「家」のため、家族に従順であることが務めとされていたのに加え、「女性はずしも劣ったあるいは柔弱な存在であるべきではなく」、教育と自主性を備えた新しい女性像といえる。女性には男児を産み育てること、¹⁰⁾ 「家」やその延長にある「国家」に貢献することが可能であると考えられていたのである。どちらも個人としての生き方より「家」や「国家」を優先させるという、従属的志向は同じであるといえる。

一方で、近代的な教育や自主性を備えながら、才智と行動力をもっ

て、「家」や「国家」よりも個人としての生き方を優先する、自立志向の女性も徐々に増えつつあった。¹⁰⁾ 妙子などもその一人であるが、それは自己実現をかなえると同時に、家族の幸福を阻害するものとされていた。当然、妙子が職業婦人めいてくることに本家は不賛成で、鶴子は手紙を通して、雪子だけでなく妙子にも、「将来良縁を求めて正式に結婚し、良妻賢母となることを何処迄も理想としてはいい」（中巻二十三章）と語っている。¹¹⁾ 女性の自己実現は、「家」という単位から眺めた時、家庭の秩序を乱すものであったことがうかがえる。大多数の有閑令嬢は、結婚を唯一の目標として育てられ、女学校を出ると家事や稽古事などをしながら縁談を待つのが一般的であった。¹²⁾

しかし、昭和十二年の日中戦争の開戦の後、昭和十三年に国家総動員法が制定されると、女性たちは非常時下の国民として「家」の内外を問わず、戦時体制への協力を要求されるようになる。それまでの良妻賢母規範に加えて、「女性には家にあるべき」とする性別役割分業は見直され、武力戦を担う男性に対し、「銃後のつとめ」「銃後の守り」は女性の役割とされた。¹³⁾ 出征兵士の送迎や遺家族の慰問といった活動には、社会参加という側面もあり、婦人運動家らは女性の地位向上への期待を込めて、こうした政策を前向きに評価した。¹⁴⁾ 総力戦のための統制は、食料や衣類をはじめとする生活物資のほか、文化や言論などにも及び、日々の暮らしのすみずみにまで

戦争遂行の目的は入り込んでいく。¹⁵

さらに、昭和十四年には厚生省によって「結婚十訓」が発表され、「なるべく早く結婚しませう」「産めよ殖やせよ国のため」といった文言が記載されるなど、国家を挙げて女性の結婚・出産が奨励された。戦時体制における人的資源確保の手段として、結婚・出産が求められたのである。¹⁶

以上のような時代背景を踏まえて見てみると、雪子の境遇は、当時の社会から逸脱した一種異様なもののように感じられる。妹の妙子は蒔岡家の異端として扱われるが、職業婦人として自立を志し、恋人を作り、個人としての幸福を追求するあり方は、時代の産物である女性像の一つといえる。しかし、雪子はその稀薄な印象に反して、時代そのものに背を向けるようなあり方を示している。「女大学」に代表される儒教的・封建的女性像にも、近代以降の規範である良妻賢母像にも属さない。

雪子は常に慎み深く清らかな姿勢を崩すことなく、三十を過ぎても「生娘の純真さ」（下巻十八章）を失わずにいる。それは、未婚女性の規範的な態度のようにも捉えられ、雪子のもつ「純潔」（中巻二十六章）は、結婚のための資格・条件として、その価値を語られる。しかし、男性への拒絶は見合いの席においても発揮され、縁談の進行を妨げるものとして、家父長制の存続とは真逆の方向に機能する。このことは、雪子の「純潔」がその自尊心に根ざすもので

あり、「国家」や「家」の管理によるものではないことを示すものといえる。

また、雪子は義兄辰雄の斡旋した縁談で、さんざん返事を持たせた末に土壇場で断り、周囲を困惑させる。この出来事は、瀬越との縁談が持ち上がった際、幸子の視点に寄り添う形で語られるが、「さう云ふ風に言葉数の足りないのが、彼女の悪い癖」で、また「一つには余りにも熱心な義兄の手前、云ひだしにくかった」ためと解釈される（上巻二章）。しかし、後に雪子の回想によって、意外な真意が明らかになる。

あれは父が亡くなつて間もない頃のこと、自分達は、それまで小さくなつてゐた義兄が急に威張り出したのに反感を持つてゐたところへ、兄の権力で無理にあの縁を押し着けようとし、圧迫すれば思ひ通りになる女だと云ふ風に甘く見てか、つてゐる様子なのが、自分は勿論、中姉にも妙子にも續に触つて、三人が同盟した形で義兄を困らせたものであつた。義兄がひどく怒つたのは、自分が「否」と云ふことをはつきりと表示せず、いくら聞かれても曖昧な返事ばかりしてゐて、最後に退つ引きならなかつたところまで来てしまつてから、強情を張り出した点であつた。自分は義兄にその点を批難された時、若い娘と云ふものは嗜みとしてもさう云ふ返事を人前で云ひはしない、自分に行き氣があるかないかは大凡そ素振りでも分りさうなものだの

に、と云つたことであつたが、ほんたうは、あの縁談には、義兄の銀行の上役の人なども仲に這入つてゐることを知つて、義兄を一層難儀な羽目に陥れるやうに、わざと返事を遷延させた傾きもないではなかつた。(下巻六章)

内気な性格によるものと捉えられた雪子の振る舞いには、父が亡くなり、新たに家長となつた辰雄が、「兄の権力で無理に縁を押し着けよう」としたことへの反発が込められていた。それは、家父長制による支配を拒絶し、制度の上での家長である義兄の支配権を否定することを意味している。また、「義兄の銀行の上役の人なども仲に這入つてゐることを知つて、義兄を一層難儀な羽目に陥れるやうに」という意図は、時岡家の経済が、辰雄の収入によつて支えられてゐるということ、延いては社会における「家」制度を無視したものといえる。

こうした行動の根底にあるのは、辰雄が制度としての「家」の維持のために、船場の店を手放し、元の銀行員に戻つたことへの不満である。「昔を恋ふる」(上巻二章)雪子は、父が存命であつた頃の「旧時代」(上巻二十一章)の生活を懐かしむあまり、辰雄の判断が受け入れられず、「止くなつた父もきつと自分と同様に感じて、草葉の蔭から義兄を批難してゐる」と考える(上巻二章)。¹⁷雪子は母親の「純日本式の美人」(上巻二章)として語られるが、先代である父が贅を尽くして育て上げた、父の理想を内面化した存在でも

ある。内的に父を所有する雪子は、生前の父の流儀にもとづき、自らの暮らしの中に時岡家の伝統をとどめようとする。辰雄との対立はその端的なあらわれであり、雪子は自身こそが父の後継者であるという自負をもつて、辰雄の家長としての支配権を認めずにいるのである。

周囲からは「古典的」(上巻十三章)「時代後れ」(下巻十七章)と評されるが、「家」の管理に身を委ね、自主性を持ち得なかつた封建的女性とは違ふ。雪子は時岡家の伝統に強い愛着を抱きながら、「家」に従おうとする姿勢はみられない。長幼の序を守り、「義兄達や姉達の意見が一致した時なら、何処へでも云はれるまゝに縁づく」(上巻四章)と話すなど、言動や振る舞いは封建的女性に通じるが、家庭内で問題が起これば意見を述べ、いざという場では「家」に縛られることなく行動を起こす。

勘当の身である妙子が、同じく実家から勘当された恋人の奥畑の家で発病した際、雪子は誰の許可も得ないまま、妙子のもとへ向かう。

「あたし此れからお春さんと一緒に行つてみるわ、あたしやつたら構へんやろさかいに」

と雪子は云つた。まさか赤痢で死ぬことはあるまいから啓坊がさう云つてくれるなら、ほかに病人の身柄を移す適当な場所もないことではあるし、そのまゝ彼処に臥かして置くのも悪くは

ないが、看護を先方に任せきりにして、放つて置くと云ふ訳には行くまい。本家や貞之助兄さんは何と云ふか知れないけれども、あたし等としてそれは出来ない。兎に角あたしが自分の一存で行く分には差支へあるまい。櫛田さんでも行つてくれるなら、まだいくらか安心だけれども、初めての医者や看護婦では心もとない。今日からお春さんの代わりに私が泊り込むことにして、お春さんは連絡係になつて貰はう。電話では様子がよく分らないので、却つて余計気が揉めるし、啓坊一人の男所帯でいろ／＼足りない物もあらうし、きつとお春さんに日に何回も往復して貰う必要が起らう。と、さう云つて雪子は身支度をし、簡単にお茶漬を掻つ込むと、姉には迷惑をかけまいと云ふ心づかひからか、幸子の許可も求めないで出かけて行つたが、幸子も全く同感の気持ちだつたので、敢て引き止めようと思ひないでしまつた。(下巻十九章)

ここで描かれるのは、世間のルールや制約を排し、自らの選択で動く雪子の姿である。「本家や貞之助兄さんは何と云ふか知れないけれども」「兎に角あたしが自分の一存で行く分には差支へあるまい」「姉には迷惑をかけまいと云ふ心づかひからか、幸子の許可も求めないで出かけて行つたが」といった考えは、「家」の管理からは独立した、個人としての責任意識に則つたものだ。このように、本家や貞之助の意向はほとんど意味を成さず、その背後にある制度

の要請をも斥けてしまう。雪子は未婚の処女として蒔岡家の庇護下にあることで、世俗との関わりを避けつつ、「家」の論理とは異なる自身の判断にもとづいて生きる、自律した存在である。

さて、看病の後に妙子は回復するが、そのことを知らされた鶴子は、幸子への手紙の中で、「最早や妙子に対しては殆ど愛情を持つてゐないこと、寧ろ妙子が捲き起す災厄から自分たち一家を守ることとのみ汲々としてゐること」(下巻二十二章)を露呈させてしまふ。本来鶴子は「姉妹のうちで一番と云つてもよいくらい優しいところのある姉」(中間十四章)と語られる鷹揚で愛情深い性質の持ち主である。しかし、本家という立場において、社会の中で「家」を背負つて立つ責任から、自己を抑制し、制度的な枠組みの中で生きることを余儀なくされている。本家や貞之助の準ずる「家」の論理とは、その支配に不都合な存在を否定するものであり、それは時に家族間の愛情と対立するものとして、姉妹の結びつきをも規制する。「全然能動的に動く力を欠いてゐるやうな」(中巻二十七章)雪子であるが、制度のもたらす支配と排除が、伝統的な生活や家族の繋がりを脅かすものであるがゆえに、抵抗を示すのである。

ところで、一九三〇年代の女性の初婚の平均年齢は二十三、四歳前後であった。¹⁸⁾職業婦人などをのぞいて未婚女性の多くは、将来の「良妻賢母」となることを期待される存在であり、雪子の場合には女学校、英文専修科を卒業した後、十年以上にわたつてそのような

状態が続いていたことになる。品行方正で穏やかな暮らしぶりが描かれ、道を踏み誤ることもなく生きる雪子だが、時代の求める「良妻賢母」の女性規範をないがしろにするようなあり方は、社会において決して誉められたものではなかった。¹⁹⁾ そのために、世間体を重んじる本家では、「まだ売れ口の極まらない」（下巻九章）妹たちの現状を憂えている。雪子は物語の中でたびたび、その受動的でおっとりとした態度や、潔癖すぎる気質、肝心な場で意思を明らかにしないことなどを、縁談を阻む要因として指摘される。周囲の思惑に背くような雪子の「失錯」は、「引つ込み思案」で「不器用」なためとも言えるが（下巻十七章）、一つは「国家」や「家」の要求にとらわれない、強固な主体性のためである。

物語は次第に戦争の影が色濃くなり、平穏であった蒔岡家の暮らしも、時局を憚ったものとなっていく。世の中が大きく揺れ動き、生活のあらゆる面で変化が訪れるが、雪子が心を傾けるのは相も変わらず、年中行事や四季の移り変わり、家族の問題など、普遍的な事柄である。こうした雪子の価値観を認め、庇護を与えてきたのは、分家の幸子・貞之助夫婦であり、雪子の持ち得ぬ経済的な力によって、世俗との調和の上に、蒔岡家の歳時を成り立たせている。彼らもまた、様式化された生活に価値を見出す人物であるが、分家の主人や御寮人様としての立場もあり、社会にとらわれずに生きることが困難であった。雪子はただ一人、何ものにも適応せず、「旧時代」

の生き方を頑なに守り通していた。時代に迎合することなく、伝統的な美意識の中だけに生きようとしていたのである。

二、蒔岡家の時間と雪子

ではなぜ、雪子は時代から逸脱した生き方を選んだのか。雪子は社会の動きから自らを遠ざけるように、縁談の場をのぞいては外界との接点を持つとせず、様式化された生活を反復する。雪子は父が在世中であつた「旧時代」の生活を理想としており、そこからの変化を受け入れ難いものと捉える価値観の持ち主である。このような持続的なあり方は、谷崎潤一郎の随筆「私の見た大阪及び大阪人」で語られた、「生活の定式」の現われとして読むことができる。²⁰⁾ 「生活の定式」とは、関西では今（昭和七年）も保存されている「一つの家庭、一つの社会に於いて長い間に自ら出来上つた一定のしきたり」であり、それは年中行事から日々の家庭生活にまで及ぶ。

『細雪』における「生活の定式」については、これまで様々な論考がなされており、秦恒平は毎年の花見に「繰り返し」を願う日本人の伝統的美意識を認め、²¹⁾ 加賀乙彦は物語を季節とともに循環する螺旋状の時間を、直線的に進行する社会の動きとは無関係に流れる、「円環の時間」と表現している。²²⁾ また、東郷克美によって「彼女たちは『生活の定式』に従って繰り返される時間の円環の中に自足しているのであって、いわば真の意味で新しい生を切り開こうと

するドラマチックな生き方をしていない」ことが指摘されており、笠原伸夫は末尾に現われた雪子の不調を「緩やかにめぐる蒔岡家の四季、身についた生活のリズム、そのような定形からいまこそ訣別しなければならぬ、という痛覚のゆえに起る」ものと解く。²⁴

物語において、これらの先行研究の論じるところの循環的時間を生き、「生活の定式」の中で暮らしているのは、幸子を中心とする分家の人々である。一方、本家を継いだ鶴子夫婦は、制度としての「家」を守るため、傾きかけた家業を家来筋に譲り、東京行きを機に「実利主義」（上巻二十六章）へと転向している。「万事が大阪時代から見ると縮まり屋」になり、食膳に上がる惣菜や借家の家賃、さらには慶弔の慣習にも出費を惜しむという風だが、こうした選択の背景には、「親子八人も家族を抱へて亡父の遺産では食べて行けなくなつた」ことや、戦時体制への備えとして「勤儉貯蓄」が推奨されていたことなどがあり、すべては蒔岡家の存続を思つてのことであつた（上巻二十六章）。²⁵しかし、「生活の定式」が失われていく様が、雪子には寂しくてならず、本家での暮らしを全身で拒絶する。

幸子と雪子とは、旧来の家風を懐かしむという点において、同じ心情を共有しており、毎年の花見を心待ちにしているのも同様である。縁談の際に嫁ぎ先として、「晩年の父の豪奢な生活、蒔岡と云ふ旧い家名」（上巻二章）にふさわしい格式と、生まれ育つた関西

の地をのぞむというのも一致している。雪子が蘆屋の家で過ぐす間、庭を眺める様子がたびたび描かれるが、庭もまた年ごとに四季を繰り返す、循環する時間の象徴である。分家での生活を愛おしみ、「どうかすれば強ひて身をおとして気のすゝまない人の所へ嫁ぐよりは、此のまゝ家に置いて貰へて」（上巻六章）と願う雪子であつたが、東京の本家に暮らして以後、その思いはますます強いものとなつていく。

分家への思い入れの深さには、姪の悦子の存在も大きく関わっている。そのことに心づいた雪子は、悦子にひとしお細やかな愛情を注ぐようになり、時には執心という形で示されるようになる。

でももし結婚するとなつたら、誰よりも一番親しくし、頼みにもしてゐた幸子と逢へなくなると云ふこと、いや、幸子にはまだ逢へもしようが、悦子と逢へなくなつてしまふこと、逢へても最早や昔日の悦子でなくなつてゐるであらうこと、——自分の及ばした感化なり、注ぎつくした愛情なりを、次第に悦子が忘れ去つて別な悦子になつてゐるであらうこと、——を思うと、母親としていつまでもこの少女からの愛慕を専有してゐられる幸子が羨しいやうな、口惜しい気持がするのであつた。（上巻六章）

雪子が嘆いているのは、これまで共に循環的時間を過ぐしてきた悦子が、年月を経て、別の悦子へと変わってしまうことであり、そ

れは雪子の認識する循環的時間から外れることを意味する。雪子は

変化を好ましいものとせず、蒔岡の娘として生きる中で、日々繰り返される暮らしの永続性にこそ価値を見出す人物である。

しかし、周囲の人物は縁談が起るたびに、雪子の変化に期待する。平安神宮の枝垂桜の満開にも重ねられる雪子だが、その人柄は硬いつぼみのまま大人になったような未成熟さを抱え込んでいる。「いつばしの分別のある大人で、もう奥さまと云はれてもよい年頃」(上巻二十二章)でありながら、異性の前での振る舞いは「十七八の娘と一緒に」(上巻二十九章)と評され、それは縁談の場において不利益な結果をもたらす。鈍重な反応は純真さの裏返しであるが、端の者にとってはもどかしくてならず、変化を求めずにはいられないのである。

橋寺との見合いに同席した貞之助は、雪子の落ちつき払った度胸に成長を認め、蘆屋の家で会うことに応じれば、「僕は何よりも雪子ちゃんのさう云ふ心境の変化が嬉しい」と喜びを見せる(下巻十五章)。ただし当の雪子は意識して態度を改めようとはせず、進展には至らない。

以前のやうな気むづかしさはなくなつたとは云ふもの、生れつきの含羞みやさはさう急に直るものではないので、井谷の忠告があつたにも拘らず、その日も特に勤めてゐるらしい風は見えず、受け答えのはきくしないことは相変わらずであつた。(下

巻十五章

結局、雪子は丹生夫人の指摘にも関わらず、頑なな姿勢を貫き、橋寺の怒りを買う。そのために貞之助は後日、手紙の中で「女があゝの歳になつて満足な挨拶一つ出来ない」と云ふことは、何としてもふつゝ、かの至り」であるとして謝罪している(下巻十八章)。また、御牧との縁談の進行中に、幸子らは東京の鶴子を訪問するが、その際にも次のような会話が交わされている。

「雪子ちゃんも、もうちよつと朗らかになつて、おあいその一つも云ふやうにせなあきませんな」

「それが今度はいつもと違つて、如才がなうて、ようしやべるねんわ。あんなんやつたら、どうやら此の話は出来さうに思ふねんけど」

「どうでもさうなつて欲しいもんやわ。来年は三十五になるやないの」(下巻三十一章)

本家としての責任を負う鶴子は、雪子の年齢を懸念し、どうにか縁づけたいと願うあまり、雪子本来の性格を弱みと見なし、変化をのぞんでしまう。雪子のよき理解者であるはずの貞之助や幸子でさえ、縁談となると、依然変わらない態度に落胆し、変化が見られれば成長と受け止める。いずれは嫁ぐ身であり、その境遇を考えれば当然の期待であるが、この場合の成長は、必ずしも肯定的にばかりはとらえられない、負の側面を持つものである。なぜなら、縁談の

場における成長とは、見合いの進行に都合の良い反応を示すことであり、それは即ち、良妻賢母となり社会の中で「家」を構築することが重要であるという、当時の女性規範に収れんされること、延いては「家」制度に回収されることを意味するからである。

また、雪子を縁遠くさせるものとして、「月の病」の前後に現れる「シミ」の存在がある。周囲は雪子が「結婚前の大切な売り物」であることを思い、「思はぬ欠点が生じた」と悲観するが、「当人はあまり感じない様子」で「無頓着」に振る舞う（上巻十二章）。沢崎との縁談が破れた一因ともみなされており、雪子を社会的な場から締め出し、蒔岡家の領域へと押し戻す役割を担っている。循環する時間に共鳴するように、周期的に浮かび上がる「シミ」は、結婚によって回復するものと診断されており、雪子と蒔岡家との結びつきが身体的なものにまで及んでいることを示すものといえる。

雪子は蒔岡家の娘であることに満ち足りており、「生活の定式」に則って、単調な日々を繰り返す。雪子の最も忌避するところとは、「生活の定式」によって回復する循環的時間が、その秩序の喪失のために、円周を結ばなくなることである。持続的な生き方は、単に蒔岡家の時間からの離脱を拒むというだけでなく、秩序を支える機能として、循環する時間を構成する「要素を担っている。たとえば、繰り返される縁談がそうであるし、季節ごとの衣裳や、一と夏に十日ほどの洋装姿なども、一家の者にとっては風物詩となっている。

「亡き父の全盛時代」、姉妹たちに与えられた生活や嗜みを、雪子は今も忘れずに身に付けており、幸子とよく思い出話をしては、「あの時にあ、もして貰った、かうもして貰った」（中巻二十四章）と昔を懐かしむ。さらに、幸子は母の二十三回忌を前にして、同じ姉妹のうちでも、雪子をより深く愛しているのは、その姿や性質に、母のおもかげを伝えているためであると、思いをめぐらせる。このように、幸子は雪子を介在することで、遠い昔に過ぎ去った「旧時代」の父母との暮らしを、身近なものとして、確かめることができるのである。

雪子もまた、本家とは別の概念をもって、蒔岡家を守ろうとしていた。家長辰雄の守ろうとしていた「家」が、血統や経済的な安定によって維持される、制度としての「家」ならば、雪子の考える「家」とは、蒔岡家の伝統や格式、長年の暮らしを通じて培われてきた生活様式である。物語の中でしばしば蒔岡家の姉妹の「若さ」が話題とされ、特に雪子は「一向歳を取らない」と人々を驚かせる（下巻九章）。その清らかさや未成熟さは、衰退していく蒔岡家の中にあって、今もなお保たれている循環的時間の表象であり、蒔岡家が蒔岡家たる証である。雪子はその身をもって、流れゆく時間を繋ぎとめる支柱となり、蒔岡家の時間のよりどころとなろうとしていたのである。

おわりに

最後に、雪子の結婚のもつ意味について、物語結末部分の解釈と合わせて考えてみたい。東郷克美は、『細雪』を「結局蒔岡家の人々が雪子という美の表象を失うまでの物語」であるという。²⁶⁾昭和十六年の春、雪子は御牧との結婚を承諾する。戦争へと傾斜していく時代状況の中で、蒔岡家の暮らしにも様々な変化が生じていた。

貞之助たちはあと半月で雪子が嫁いで行くことを思ひ、慌しい春の一日々々が惜しまれてならず、何がな記念の行楽をでもと考へたのであつたが、今年は去年よりも物事が一層むづかしくなつてゐた。現に雪子の色直しの衣裳なども、七・七禁令に引つ懸つて新たに染めることが出来ず、小槌屋に頼んで出物を捜させたやうな始末で、今月からはお米も通帳制度になつたのであつた。それに今年は菊五郎も来ず、花見は去年でさへ人目を憚つたくらゐなので、尚更遠慮しなければならなかつた。(下巻三十七章)

蘆屋の分家は、貞之助の仕事が軍需会社に関係し出したことで経済的なゆとりが生まれるが、時局に脅かされ、「生活の定式」を維持することはかなわない。これまで循環的時間を生きてきた蒔岡家の人々もまた、進行する時間に統合されつつあつた。それに伴い、雪子の「シミ」の周期も乱れ、不規則なものとなるが、このことも

循環的時間の崩壊を示す一徴証といえる。もはや蒔岡家は、雪子に十分な庇護を与え、その美質を肯定することが困難な状況にあり、様式化された持続的な暮らしを成立させる空間たり得ない。傾きつつある蒔岡家において、雪子がかつての栄華の名残ともいえる存在であり、貴族出の御牧との結婚を受け入れることで、「旧時代」と変わらぬ一門の格式を守ろうとするのである。御牧がアメリカで航空学を学び、結婚を機に軍需工場に職を得たことも、雪子に象徴される伝統的な美や生活様式が、近代的な価値観の前に迎合せざるを得ず、またそれに依拠することでしか保つてはいけなことを示唆しているといえよう。

また、結末部分においては、蒔岡家の外界へと向かう中で雪子の「下痢」が書かれ、反古原稿ではさらに、結婚による「処女」との決別が予測されている(下巻三十七章)。²⁷⁾日本の伝統美の象徴たる雪子は、進行する時間に取り込まれていく中で、変調を来し、「純潔」を汚されてしまう。それは、戦中戦後の社会の変動によって、日本の美が姿を変え、世俗に侵食されていった、時代の様相とも呼応している。

かくして、雪子が生をもつて保持してきた「旧時代」との連続性は断ち切られる。御牧との結婚による物語の終結は、当時の社会状況における雪子の限界、あるいは敗北といえるかもしれない。しかし、雪子に最も近い人物である幸子は、上巻の末尾で雪子の

結婚生活について、次のような予感を示している。

「雪子ちゃんは黙つて、何でも自分の思ふこと徹さな措かん人やわ」

と、幸子が云つた。

「——見て、御覧、今に旦那さん持つたかて、きつと自分の云ふなりにしてしまふよつてに」(上巻二十九章)

東京に暮らしていた雪子は、本家の時局柄に応じた生活に馴染まず、見合いにかこつけて蘆屋へと帰省する。それが三月三日のことで、雛人形によって迎えられるのだが、さらに花見の衣裳までしっかりと用意してきており、四月の中旬まで滞留を続けた。こうした雪子のしぶとさを評して、幸子が漏らしたのが先の引用の言葉である。論者はここに、一度は失われかけた伝統的な美や生活様式が、再び暮らしの中に呼び返され、やがては循環的時間へと回帰する、雪子の結婚生活とそこに重ねられる戦後日本の可能性を読み取りたい。その弱々しい風姿に似合わぬ柔軟な強さもまた、雪子に託された日本の伝統のあり方といえよう。

以上、『細雪』に描かれた雪子の生き方を検討してきた。雪子は良妻賢母となることを期待される立場にありながら、娘時代から抜け出そうとせず、蒔岡家の「生活の定式」を乱すものがあれば、国家の基盤を支えるための「家」制度や家父長制にも抗おうとする。持続的な暮らしは、その平穏さとは裏腹に、国家に対して非協力的

な性質のものであった。そもそも、「旧時代」への愛着から、変化を拒み、循環的時間の中にあるとする、雪子の生き方そのものが、直線的に進行する社会の動きに背くものであり、戦時体制の整いつつあった当時の世の中や、その次に到来する時代への拒絶を意味するものである。しかし、そうした生き方は、年ごとに繰り返される日常の中でのみ成り立つものであり、蒔岡家が進行する時間に統合され、「生活の定式」が維持できなくなった時、雪子は俗なる外界と直面させられ、時代の変化に曝されてしまう。かくして雪子の物語は、御牧との結婚による終結を迎えるが、それは戦前にのみ存在し得た日本の美の喪失を意味するものなどでは決してない。物語中において発揮される、雪子の執念とも呼べるしぶとさや、幸子の抱いた予感から導き出されるのは、その結婚生活、戦後日本の将来における、伝統的な美や生活様式の再建の可能性である。

実際、『細雪』に結実された美意識は、谷崎の後の作品にも引き継がれ、随筆等を中心に、花見や月見といった歳時や、季節の到来を待ちこがれる心情をみることができる。晩年の作で絶筆となった「七十九歳の春」においても、桜の開花に気を揉んだことや、京都の春を楽しむこと、雛人形を注文したことなどが述べられており、秦恒平はそこに描かれた情景を取り上げ、「あらゆる面で二十年前の『細雪』の花見の場面と一重ねに出来る」ものであると評している。²⁹過去との連続性を持たない戦後の時間は、「生活の定式」の

再現を通して、一度は断ち切られた『細雪』の時間へと接続される。ここに、ささやかではあるが、戦争を経てなお日常の中に息づく、日本の美の根強さを確かめ、筆を置きたいと思う。

【注】

- (1) 伊藤整「解説」(『谷崎潤一郎文庫七』昭和二十八年、中央公論社)
- (2) 中村真一郎「女が描けるかどうか、また、どのように描けるか」ということなど……(『近代文学への疑問』昭和四十五年、勁草書房)
- (3) 藤田修一「第七章、虚構美の構築者」(『谷崎潤一郎論』昭和六十三年、曜曜社出版)
- (4) 東郷克美「細雪」試論―妙子の物語あるいは病氣の意味―(『日本文学』昭和六十年二月号)
- (5) 三田村雅子「万華鏡へ人形」の家の『細雪』(『近代文学研究』平成十八年三月)
- (6) 丸川哲史「細雪」試論(『群像』平成九年六月)
- (7) 折口信夫「細雪」の女(『人間』昭和二十四年一月)
- (8) 菊池弘「谷崎潤一郎『細雪』」(安川定男編『昭和の長編小説』平成四年、至文堂)
- (9) 牟田和恵「第三章、家庭の登場とそのパロディクス」(『戦略としての家族』近代日本の国民国家形成と女性』平成五年、新曜社)
- (10) 永原和子「良妻賢母教育における「家」と職業」(女性史総合研究会『日本女性史四』近代『昭和五十八年、東京大学出版会』)
- (11) 時岡家の長女鶴子は、六人もの子を産み育て、「家」の維持のために勤儉貯蓄に励む、時代の求める良妻賢母像そのものであるといえる。本家を継いだ責任から、世間体や体面といった概念をもって、妹たちの生き方を規制し、厳格な態度を示す場面もみられるが、その本質は「昔の箱入娘の純な気質を、今もそのまゝ持つてゐる」(上巻「二十一章」)「いくつになっても娘心を失はない」(下巻「三十一章」)女性である。鶴子は二つの価値観の間で揺らぎ、時には非情な判断をとりながらも、妹たちの身を案じ、「花やかなりし昔」(下巻「八章」)への未練を捨てきれずにいる。
- (12) 中島邦「職業婦人」(『事典』家族』平成八年、弘文堂)は、戦前の未婚女性に対する社会の認識について、「良妻賢母主義教育政策のもとで、学校を卒業すると花嫁修業をして結婚するというのが一般的な女性の理想的ライフパターンであるとされて、職業につくのは家庭の貧困とか結婚のできない特別の事情がある者として蔑視する風潮が見られた」と説明している。
- (13) 加納実紀代「女たちの〈解放〉への欲求をくみ上げた「国防婦人会」――市井の女たちの戦争協力」(『女も男も』歴史に学ぶ 戦争体制はいかにつくられたか』平成二十六年、労働教育センター)
- (14) 永原和子「Ⅲ戦争・平和 Ⅳ、女性はずなぜ戦争に協力したか」(『近現代女性史論』家族・戦争・平和』平成二十四年、吉川弘文館)
- (15) 国民精神総動員中央聯盟『戦時婦人読本』(昭和十三年、日本青年教育会出版部)では、「一切の民需品は軍需品になる」という方針のもと、「資源の愛護、消費の節約、貯金奨励」による「国家への報公」が呼びかけられ、化繊の婚礼衣装を着用した花嫁の美談などが紹介されているほか、「文化生活」は「時停れ!」「病氣も強い氣力で治しませう」といった極端ともいえる提案もなされている。
- (16) 平野敏政・平井一麥「女性をめぐる社会的環境の歴史的展開―女性史年表の記載項目から」(『帝京社会学』平成二十二年)
- (17) 「雪子の懐かしむ」昔「旧時代」とは、時岡家が船場で全盛を誇り、先代である父の生きていた「大正の末期までのこと」(上巻「二章」)であり、

それは前近代との連続性を持ったものとして描かれている。東京における近代が、江戸期の封建的な武家社会とは異なる、匿名の人々の集まる都市文化を形成していったのに対し、大阪船場では、近代以降も商人たちによる独自のしきたりや言葉遣い、「土蔵造り」(上巻二章)の店舗といった、「旧幕時代」(上巻二章)から続く伝統が保持されており、「家名や格式」(上巻二十六章)が強い意味をもった。

(18) 厚生労働省「人口動態統計」(内閣府ホームページ http://www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/h17/10.pdf/01_honpen/pdf/st000001.pdf#page=5)

(19) 女性が晩婚や独身であることは批判される風潮にあり、川崎利太『結婚読本』昭和十一年、佐藤新興生活館)は、女子の使命は母になることにあるとして、独身であることの「罪悪」を説いている。

(20) 「中央公論」(昭和七年二月、中央公論社) ↓ 『谷崎潤一郎全集第十六巻』(平成二十八年、中央公論社)

(21) 秦恒平「花と風―日本の永遠について―」(『花と風―秦恒平評論集―』昭和四十七年、筑摩書房)

(22) 加賀乙彦「円環の時間『細雪』」(日本の長篇小説『昭和五十一年、筑摩書房』

(23) 注(4)に同じ

(24) 笠原伸夫「蔦岡家の四季」(『谷崎潤一郎―宿命のエロス―』昭和五十五年、冬樹社)

(25) 戦時体制に向けた貯蓄奨励政策は、昭和十三年二月に閣議決定され、国民運動として推進されていった。その具体的な内容については、大蔵省昭和財政史編集室編『昭和財政史第十一巻金融(下)』(昭和三十六年、東洋経済新報社)に詳しい。

作中においては、雪子が一貫して自家の「実利主義」に批判的な姿勢を示しているのに対し、貞之助は時局や家長としての辰雄の立場を考慮

し、「今迄みたいな虚栄心を捨てて大いに勤儉貯蓄主義で行こう」とするの無理のないことで、「誰に聞かれても結構なこと」と理解を見せる(上巻二十六章)。こうした貞之助の反応からも、人々の心はすでに戦争へと向かっており、旧来の生活様式を手放すことは、国家への協力として誉められるべき行為とされていることがうかがえる。

(26) 東郷克美「作家のモチーフ・意図の推定―『細雪』を例として」(『解釈と鑑賞』昭和五十六年十二月)

(27) 初稿では、物語の結末部分にあたる下巻三十七章で「下痢」に関する記述はなく、蘆屋の家への愛着や、「三十五年間の「処女」に別れを告げると云ふことを、――今更別に幸福など、思ふ気にはなれなかつた」という雪子の心情が述べられている。

(28) 「中央公論」(昭和四十年九月、中央公論社) ↓ 『谷崎潤一郎全集第二十三巻』(平成二十九年、中央公論社)

(29) 秦恒平「谷崎潤一郎論」(『花と風―秦恒平評論集―』昭和四十七年、筑摩書房)

付記「細雪」の引用は、『谷崎潤一郎全集第十九巻・第二十巻』(平成二十七年、中央公論社)に拠る。

なお本稿は、平成二十八年年度広島大学国語国文学会研究集会(平成二十八年七月九日、於広島大学)の口頭発表を経て作成した。会場内外で指導を賜りました先生方に、心より御礼申し上げます。

―くまお・さや、広島大学大学院文学研究科博士課程後期在学―